

東家の長男は、四番組  
組長？

Chrom\_sp

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔防隊に深い繋がりがある『東家』

そんな東家に生まれたひとりの男

男として生まれた者が魔防隊の組長として奮闘する物語

第二話  
第一話

目

次

6 1



# 第一話

今から数十年前、魔都<sup>まと</sup>という謎の異空間が出現した。

その場所にしか実らない果実”桃”が存在し、食べた者に異能の力を与えるが、その恩恵を受けたのは女性だけだった。

男女平等という言葉は無くなり、この世は女尊男卑の社会へと変化していった。

現世と魔都を繋ぐクナド、通称”門”<sup>しゆうき</sup>は突発的に発生することがある。

門から魔都に生息する化け物”醜鬼”<sup>しゅうき</sup>という化け物が出てきて人を襲う場合と、門に現世の人が入り迷い込んでしまう場合の魔都災害がある。

どちらの場合も、桃の力を得た女性で構成された組織”魔防隊”が人々を守つている。

「だ、誰かーっ！助けてくれーっ！」

しかし、魔防隊も必ずしも全ての人を助けるわけでは無い。

魔都に入り迷つてしまふと、魔防隊の隊員が駆けつけるまで待つ必要があるが、魔防

隊を待つてゐる間に近くに醜鬼が現れ襲われてしまふ。

「なんで俺がこんな目に遭うんだよ！誰かーっ！」

叫ぶ男子高校生は不幸にも魔都に迷い込んでしまい、多数の醜鬼に追われてゐる。逃げながらも石を醜鬼に投げつけるが、桃の力でしか倒せない醜鬼には無意味だった。

もうすぐ後ろには醜鬼達が迫つてきて、今にも高校生掴みそうだ。

その時、高校生の横を誰が通り過ぎ醜鬼達を吹き飛ばした。

「助けに来るのが遅くなつたな、もう安心しろ。

今、助けてやる」

「え？……はっ？」

高校生の前に現れたのは自分と同じ男だが、身体には芋虫の様な醜鬼が巻きついていた。

男には桃の力はもたらさない、そんなことは世界中の誰だつて知つてることだ。

だが、男が醜鬼を吹き飛ばしたことにより高校生は未だ理解できなかつた。

「大丈夫、俺は特別だからな」

そういうと男は、芋虫の醜鬼の口から刀を抜き取り、目にも留まらぬ速さで次々と醜鬼達を切り裂いていく。

あつという間に高校生を追つていた醜鬼は全滅し、男も傷一つなく醜鬼の返り血を浴びているぐらいだった。

周りに醜鬼がいなくなつたことを確認した男は、高校生の安否確認をするために近づいた。

「あのっ！助けてくれてありがとうございました！」

それであなたは「一体？」

「俺は魔防隊四番組組長の東あずま慶司けいじだ」



——女に産んでもげられなくてごめんなさいね

幼い頃、母親から言わされたのがこの言葉だつた。

たしかにこの世界は女尊男卑の社会だし、女にしか桃の力は使えない。

男に生まれてきた時点で女に劣つてゐる。

だけど、俺には特別な力があつた。

常人からかけ離れた身体能力、桃の力を得た女も捻じ伏せ、通常兵器では倒せない醜鬼も倒してしまう。

まるで天から与えられた肉体と言つても過言ではないと思う。世界中探してもこんな男、俺一人だろう。

「まあ、俺みたいのがポンポン居たらまた世界がひっくり返るか」

「まだ着かないのか。大分、歩いた気もするんだがさつき助けた高校生は寝てしまいおんぶして目的地まで歩いているが、一向に着く気がない。配がない。」

走つて行こうとしたが、寝ている彼を起こすのも申し訳ない無いと思つてしまつた。

こういう時、移動系の桃の力は便利だと思う。

すると、前方から一匹の醜鬼が走つてきたが、よく見ると人が乗つっていた。

魔防隊で醜鬼に乗るのは一人しかいない。

「寧が視えたと言つていたと聞いて来たが、慶司だつたか」

七番組組長羽前 京香

この人は俺と同じで自身の肉体で醜鬼を倒している。

桃の力も得ているが、無窮の鎖という奴隸にした対象の力を底上げする能力

よく七番組には訓練などでお世話をなつてている。

「京香さん、ちょうどよかつたこの少年を現世に送つてあげて下さい」

「魔都災害の遭難者か。わかつた、こちらで現世に送り届けておく。」

俺は、京香さんが奴隸化している醜鬼の背中に彼を乗せた。  
ともあれ、少年が無事で何よりだつた。

「私は寮に戻るがお前はどうする？」

「俺は遠慮しておきます。また訓練の時にお邪魔されてもらいます」

「そうか

……なあ慶司、もう一度だけ私の奴隸になる気はないか？」

そう、俺は一度だけ京香さんの奴隸になつたことがあるが、その時は強化された俺を京香さんは制御出来ずにいた。

あとで褒美のことを聞いておらず、まさかあんなことになるとは思つてもなかつた。  
「すいません、俺の身が持たないので勘弁してください」

「？お前の身体は丈夫だろ？」

身体の方じや無いです、心の方です。

断つた後、「…残念だ。だが私は諦めんぞ」と言つて去つていつた。

また、合同訓練の時に言われるんだろうなと思いため息を出しながら、魔都を駆け走り出した。

## 第二話

——女より少しだけ身体能力が高い男が生まれてくるケースはいくつかあつたが  
——桃の力を得た女より優れた男は世界中探しても彼1人だつた  
——桃の力なしで、己の肉体のみで醜鬼を倒す

——東 慶司

——正に超人

▽

——今から約二年前

多摩川クナド近くにある東の本家の一室に二人が向かい合っていた。

一人は東慶司、もう一人は東家の現当主である東 海桐花とべらがいた。

「慶司よ！魔防隊の四番組組長となれ！」

慶司には海桐花の言葉が理解できなかつた。

魔防隊は『四』の数字を除いた一番組から十番組までの九つの組で構成されており、隊員は桃の力を得た女ののみ。

因みに、四番組が無いのは『四』が縁起の悪い数字だからだ。

だが、男が魔防隊の一員になる事など認められるはずがない。

「急に呼び出したと思ったたら、ぶつ飛んだ話だな。男なのに魔防隊に入れか……ましてや、組長になれなんて」

「此方こなたが提案したんじやが、りうも快く賛同してくれたぞ。それに貴様は男でも、その肉体があろうが」

海桐花は慶司の身体に指を差す。

幼い頃から身体能力がどの女よりも高く、中学生の頃には桃の力を得た女を圧倒した。

更には、魔都に迷い込んでしまった時に魔防隊が到着するまで、襲つてくる醜鬼を倒していたという。

その後は、冥加みようがりうの元で強制的に修行されられ現在に至る。  
「……わかった。でも、こっちの要件も聞いてもらうぞ」

「なんじや、言つてみよ」

「魔都用の武器を二つほど用意してくれ」

慶司が出した条件は、魔都用に改造した武器を用意してもらう事。

通常の兵器では醜鬼は倒すことはできず、桃の恩恵で発動した力でなければ倒せない。

普段は肉体のみで戦うことが多い慶司だが、修行で様々な武具を使用していた身としては、あつた方が便利なのだ。

「そんなもので良いのか？貴様なら日万凜ひまりについて言うと思つたんじやが」

「……日万凜はアンタらを見返そうとしてるんだ。俺が今ここで日万凜のためにするべき事は何もしない事だ」

慶司には日万凜がどれだけの努力をしてきたか見てきた。

だからこそ、顔に泥を塗る真似はしない。

「どうか、此方の用件は終わりじゃ。武器に関しては出来次第取りにくるが良い。東家

当主として今後の活躍に期待しておるぞ！」

「そうがよ」

一室を出た慶司は気分展開に魔都に行くことにした。

その際に、廊下で誰かとすれ違つたが慶司は気づかずそのまま進んでいった。

そして、その者に強者のプレッシャーと恐怖の念を抱かせたことを慶司は知る由もない。